

第 57 回 一枚の写真から始まった宍道氏研究



昭和 61 年、まだ 20 代半ばだった私は、ヘリコプターに乗り空から遺跡を撮影する機会がありました。その時撮影したのがこの写真です。

ちょうど宍道町（現松江市宍道町）坂口地区側の樹木が伐採された直後で、それまで森に覆われていた金山（坂口）要害山城のほぼ全容を写すことが出来たのです。城には「八十八成（はちじゅうやなり）」と呼ばれる平坦地があると伝えられていましたが、突然目の前に現れた曲輪群に大変驚き、夢中でシャッターを切ったことをよく覚えています。

↑金山(坂口)要害山城稲田撮影

この写真をきっかけに、要害山城の文化財指定を目指す過程で、昭和 63 年に「金山要害山を語る会」が出来ました。参加者は金山、坂口地区の皆さんで、城にまつわるいくつかの伝承が採録され、同時に井上寛司先生、山根正明先生を招いて宍道町の中世史研究、山城研究も始まりました。その成果は、やがて宍道町ふるさと文庫『宍道町の山城』、宍道町歴史史料集『中世編』、『宍道町史』へと結実します。金山、坂口地区の皆さんと研究者、行政担当者の連携により、中世宍道氏の研究は飛躍的に進んだのです。平成 28 年 3 月刊行の『松江市史通史編 2 中世』では、長い間の宍道氏研究の成果や新出史料を基に松江市域、出雲国域の視点に立って宍道氏を論じています。

ちなみに、宍道氏は近江佐々木氏の支流に属する出雲源氏の出で、尼子氏祖となった尼子高久の弟、秀益を祖とする家柄であり、古代以来の地名をもつ「宍道」に土着したことから宍道氏を名乗ります。その出自から、室町幕府で「外様衆」と位置づけられたり、尼子氏の「御一族衆」として位置づけられるなど、尼子氏に比肩する、あるいは上まわる力を持っていました。

よく知られる戦国武将宍道隆慶は、天文11年（1542年）に大内義隆が出雲侵攻を開始すると、尼子氏に反旗を翻し、大内氏側に加わり、やがて義隆が退却すると、共に山口へ転出します。紆余曲折を経て、永禄5年（1562年）に毛利氏の出雲侵攻に加わり、出雲に復帰、旧領の支配を回復し、天正5年（1577）日、波乱に満ちた生涯を終えました。宍道氏ゆかりの「金山（坂口）要害山城」、「豊龍寺開基宍道隆慶坐像」、「宍道伊予守遺物九条大袈裟」、「三条宗近銘太刀」は現在松江市指定文化財となっています（詳しくは、『宍道町史』参照）。

さて、宍道町が松江市と合併する直前の平成16年暮れ、全国の宍道さん、佐々布さんを電話帳で調べ、案内状を出し、20年近くにわたる宍道氏研究の総まとめとして井上寛司先生、山根正明先生を講師に「戦国武将宍道氏講演会」を開催しましたが、その講演会がきっかけとなり、宍道正年先生の呼びかけによる「全国宍道氏会」が結成されたのです。私は何もしていませんが、「顧問」という肩書をいただきました。

「全国宍道氏会」は、「宍道」姓を持つ皆さんの集まりとして学習会を重ね、戦国武将宍道氏宗家の末裔、宍道晃氏とも連絡を取りつつ、戦国期末に宍道氏が転出した現在の萩市周辺や山口市周辺にまで学習の範囲を広げ、戦国期末の宍道転出後の足跡を丹念に明らかにしていきました。毛利氏の萩移封後の宍道氏宗家は萩に大きな屋敷を構え、重臣として長州藩を支え、同じく毛利氏の家臣となった尼子氏の跡が絶えそうになると、養子として入り血脈を守ったことも分かってきました。時代背景の中での分析が必要にもかかわらず、「尼子氏への裏切り」、「大野氏への謀略」など、とかく出雲地方では芳しくない言われ方をする宍道氏ですが、激動の時代をくぐり抜け、幕末まで武士として生きた姿が明らかになってきました。そして、「全国宍道氏会」による調査研究の成果は、宍道正年先生のご尽力でビデオとしてまとめられています。

一枚の写真から始まった宍道氏研究は、多くの方々のご参加を得ながら、実に30年に及んでいるのです。

(平成28年8月9日/松江市史料編纂課長稲田信)